

【福岡】目指すは地域の在宅医療拠点「総合相談窓口として機能したい」-川本京子・八幡医師会立はっちい診療所所長に聞く◆Vol.2

医療機関向けにオンライン診療も実施

2025年6月16日（月）配信 m3.com地域版

医師会立としては全国初となる在宅注力型クリニック「八幡医師会立はっちい診療所」（北九州市）では、健和会町上津役診療所で14年にわたり在宅医療を行ってきた川本京子氏が所長を務める。川本氏は、「地域医療のメッカ」とも言われる長野県の佐久総合病院に外科医として勤めていた頃、在宅医療に関心を持ち看取りも行っていた。在宅医療が法整備されていない約30年前に川本氏はなぜ、この分野に関心を持ったのか。（2025年5月7日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



川本京子氏（北九州市八幡医師会提供）

——八幡医師会立はっちい診療所が開院して1カ月が過ぎました。現在の患者数を教えてください。

健和会町上津役診療所に勤務していた頃の在宅患者さんを継続して診ているので、現在は八十数人を担当しています。居宅の患者さんが5分の2強を占めており、残りが施設の方です。開院してからの新規患者さんは同診療所の外来患者さんの移行や、病院・診療所・施設からの依頼を含めて9人ほどいます。

先ほど話したように当院は在宅医の育成も行いたいと考えており、在宅医療に関する相談と当院の見学希望がそれぞれ1件ずつ寄せられています。

「医師国保加入者の負担減を」オンライン診療も実施

——オンライン診療システム「CLINICS」のサイトによると、はっちい診療所は医療機関向けにオンライン診療も行っています。対象を医療機関にしているのは珍しいと思いました。

これは西田英一会長が発案したもので、医師国民健康保険の加入者にとって便利なサービスを提供したい思いがあります。日本の医療保険制度において、医師が自分自身を診療する「自己診療」は禁止されており、また、医師国保加入者においては、自分の家族や自院の職員を診療する「自家診療」も認められていません。そのため、医師や職員、ご家族が診療を受けるには仕事の合間に他の医療機関に行く必要があり、これが現場では負担になっています。

そこで、当院が八幡医師会会員の先生と医師国保に加入しているご家族、職員を対象にオンライン診療を行うことで負担の軽減を図りたいと考えています。オンライン診療の適用、例えば、状態の安定している慢性疾患の患者さんで定期処方が必要なケースなどが望ましいと思いますが、このあたりを見極めながら対応し、責任をもって診療できる体制をつくるのが当面の目標です。西田会長と専務理事、理事の3人が交代制で担当します。良い診療形態を築けたら対象エリアを広げる構想もあります。

病名告知ない時代に外科で看取り「何とか希望かなえたい」

——川本先生は健和会町上津役診療所で14年にわたり在宅医療を行ってきました。在宅に関心を持ったきっかけをお聞かせください。

長野県の佐久総合病院に勤めていた頃にさかのぼります。私は1990年に愛媛大学医学部を卒業し、佐久総合病院で研修を受けました。私はいろいろな診療科を見た上で進路を決めたかったので、当時は珍しい全科ローテーションを採用しているこの病院に入職しました。もともと手を使って物を作るのが好きで、漫画の『ブラック・ジャック』も愛読していたので、研修後は外科の道に進みました。

そのような経緯で同院の外科に10年勤めたわけですが、このときに今で言う在宅医療への関心が高まりました。当時は在宅医療が法整備されておらず、訪問看護もなかった時代です。しかし、地域医療を重んじる佐久総合には患者さんの生活背景を尊重しながら診療する文化が息づいており、外科においても「患者さんの最期まで診よう」というマインドがありました。

——「家に帰りたいという患者さんを何とか自宅で過ごせるように」という先生の当時の思いが過去の資料につづられています。

当時は病名告知もない時代です。医療の慣習と患者さんの気持ちの狭間に立ち、いかにして患者さんに予後が短いことを伝えるか——。これはなかなか難しく、タイミングを逃してしまい、もどかしい思いをしたこともあります。しかし、院内にも私と同様に、「患者さんの希望をかなえてあげたい」「患者さんがずっと過ごしてきたご自宅に帰してあげたい」と思う医療者がいました。地域にも在宅医療を行っている開業医の先生方がいたので、彼ら彼女らと協力しながら希望する患者さんは通院に切り替えてもらい、最期を外科で看取ったり、あるいは開業医の先生に在宅医療をお願いしたりしていました。

——先生はその後、曲折を経て2011年から健和会町上津役診療所で在宅医療を行います。先生にとっての在宅の魅力とはどんなものですか。

患者さんの表情が違いますよね、家にいると。病院の中ではどうしても医療者が主導して患者さんは受け身になりがちですが、自分の城であるご自宅では患者さんが主人公です。患者さんが最期までをどう過ごし、何をしたいかをご家族と一緒に尊重し、支えていけることが大きな魅力。「家にいれて良かった」と言われるのが一番のやりがいです。

——最後に、はっちい診療所の所長として今後の展望をお聞かせください。

地域における在宅医療の拠点、総合相談窓口のような存在に成長していきたいです。地域の医療従事者みんなで一丸となって在宅医療を推し進め、患者さんやご家族にとって「おうちがまるで病室のよう」な状況になることが理想です。合わせて、ゆくゆくは若い先生と一緒に働きたいですね。興味のある方は八幡医師会の[ホームページ](#)などを通してご相談いただけるとうれしく思います。

◆川本 京子（かわもと・きょうこ）氏

1990年愛媛大学医学部卒。佐久総合病院での研修後、同院外科に勤務。2000年公益財団法人健和会大手町病院外科。2011年に健和会町上津役診療所に移り、在宅医療も行う。2025年4月、北九州市八幡医師会立はっちい診療所の所長に就任。八幡医師会、北九州市医師会理事。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

